

インドネシアの環境問題

近年、インドネシアでは経済発展に比例し、環境問題が深刻さを増しています。特に、ジャカルタ、スラバヤ、バンドン、メダンなどの都市部では、急速な経済成長が始まった 1980 年代から工業化や自動車数の増加による大気汚染が顕在化しています。ジャカルタでの警視庁登録の車両数は急激な伸びを続けており、自動車メーカーがどんなにCO₂排出削減への取り組みを進めても、普及の速度に追いついていません。

環境問題が深刻なのは都市部ばかりではありません。スマトラ島の森林地帯では大気汚染こそないものの、別の問題が生じています。

インドネシアは各種の特殊動物の存在でも知られています。例えば、スマトラ島のスマトラ象はトラやオラウータンに並び、インドネシアにおいて最も絶滅の恐れが高い生物のひとつです。現在、野生のスマトラ象は 2,400~2,800 頭、30 年以内には絶滅するともわれています。スマトラ島での象の生息数は世界最大規模を誇っていますが、経済発展に伴う製紙産業や油ヤシの農園開発によりその数は減少を続けています。

また、インドネシアの熱帯雨林は、沈香（じんこう）、白檀などの香料、シナモン、クローブなどの香辛料、家具の材料となる籐など、木材以外の森林作物の宝庫でもあるため、違法な開発が後を絶ちません。インドネシア政府は森林保護のため法律により伐採を禁じる区域を細かく規定し、野焼きも禁じてきました。しかし、違法な開発行為や森林破壊が事実上、長期間にわたって野放しにされてきたため、スマトラ島は世界で最も森林が減少している地域のひとつとなっています。

ここまでは、単なる他国の環境問題としか捉えられないかもしれませんが、しかし、その他国の環境破壊に自分たちの国が加担しているとしたらどうでしょうか。

インドネシアは世界有数のエビ生産国でもあります。2000 年の統計によると、中国、タイに次いで世界第 3 位、漁獲量は 40.2 万トンに上っており、このうち 10.2 万トンは海外に輸出され、国内での消費は 30 万トンです。この 20 年、養殖エビの生産が益々盛んになってきており、その増設のために破壊されているのがマングローブ林です。マングローブ林を伐採し造成された池で養殖されたエビ、その恩恵に与っているのが海外のお金持ち、とりわけ日本人なのです。日本はインドネシアから輸出されるエビの 60~70%を買っており、ここ数年、日本への最大のエビ供給国となっています。大きく、おいしいエビは海外へ輸出されるため、国内のインドネシア人にいきわたることはありません。しかし、エビの養殖は現地住民の雇用を生み出し、所得を向上させ、インドネシアに外貨をもたらす等、プラスの面も大いにあります。

先に述べた都市部の大気汚染や森林開発の問題と同様、簡単な解決法はないでしょう。

今後、インドネシア社会は多くの人々の利害関係を満たしつつ、持続可能な環境のあり方を見いだす必要があります。また、我々も自分たちの食生活が他国の環境に少なからず影響を与えていることを理解すべきなのでしょう。先進国、新興国双方の人々がそれぞれの立場から力を結集し、一人ひとりができることを真剣に考える時期に来ているのです。

以上

<これまでの岡山県インドネシアビジネスサポートデスクレポートは[こちら](#)から>

★岡山県インドネシアビジネスサポートデスク（P.T. J C内）概要★

所在地：WISMA NUSANTARA BUILDING 24th Floor

Jl. M. H Thamrin Kav 59 Jakarta Pusat Indonesia 10350

デスク担当者：PT.JC 武井 和宏 (たけい かずひろ)

対象エリア：インドネシア全域

※「岡山県インドネシアビジネスサポートデスク」では、岡山県内に事業所を有する企業や経済団体等のインドネシアでの事業展開を支援しています（岡山県から[公益社団法人 日本インドネシア経済協力事業協会](#)に業務を委託）。ご利用に当たっては、「[岡山県インドネシアビジネスサポートデスク](#)」[利用の手引き](#)をご覧ください。また、[岡山県産業企画課マーケティング推進室](#)（電話 086-226-7365）までご相談ください。

※本レポートは岡山県内企業のインドネシアでの事業展開の一助とするため作成されたものであり、サポート対象に該当しない個別のお問い合わせには対応しておりません。